

## 漱石「文学論」をめぐる総合研究

夏目漱石『文学論』は、東京帝国大学英文学科における漱石の講義をもとに、同講義を受講した中川芳太郎の作成した草稿に漱石自身が手を加えて刊行されたが、草稿の不備や出版に際しての不手際などの諸条件のために、いわば生成途上で成ったものである。そのため、漱石の文学思想や創作の背景を断片的に伝える資料ではあるものの、首尾一貫した読解の困難な未完の書物として遠ざけられるか、あるいは吉本隆明・柄谷行人・小森陽一らによる再評価に代表されるように、漱石文学の起源としての超越的位置を付与されるかを両極として、さまざまに分裂した評価の場に置かれてきた著作である。

本論文の第一の成果は、刊本『文学論』を唯一の対象としてきた従来の研究に対して、厩大な資料の綿密・周到な検討にもとづき、本文レベルでの生成過程を跡づけた点にある。

服部は、漱石自身の講義ノート、中川草稿およびそれに対する漱石の書き込みや書き下ろし原稿はもとより、中川、金子健二、木下利玄、若月紫蘭らの受講ノート、さらには木下利玄らの日記のほか、書簡・証言、刊行時に付された正誤表などを横断的に調査し、『文学論』の生成過程をあたうるかぎり精細に跡づけることで、刊本『文学論』がさまざまに輻輳した情報の集成であることを実証している。

さらに『文学論』初版以降の諸本を調査し、初版におびただしく残った誤植が後の刊本において順次訂正される一方、新たな誤植を生むなど、本文系統に複雑な出入りがあることを検証しているのも、そうした意図にもとづく。

従来『文学論』研究の多くが、唯一の本文の確定、その起源としての作者漱石の文学思想の再構成に直接的に結びつくものを指向してきたのに対して、むしろ漱石に由来する論理矛盾や議論の整理不足などをも含めた本文の本質的な不確定性・非決定性・複数性を浮き彫りにし、『文学論』という書物の存在様態の本質を問い直したことは、今後の『文学論』研究が確実に参照すべき基盤的な前提となるものである。

以上のような基盤的研究の分析視角を具体的に活用し、広範な視野での野心的な問題提起を試みていることも、本論文の重要な成果である。

本論文は、「文学論」講義だけでなく、「十八世紀文学」講義（刊本『文学評論』[1909]の原型）や「形式論」講義（刊本『英文学形式論』の原型）を含めた東京帝国大学における漱石の講義全般と、それらの講義と時間的に並行もしくは近接した『草枕』『二百十日』『野分』などの初期創作群との関係を検証し、講義内容が創作に反映するだけでなく、創作的営為によってもたらされたものが講義に反映されるという相互反照的な関係を跡づけている。

この成果は、今後の初期創作研究のあり方に重大な影響を及ぼす基本的な分析視角となることを予想させる。

本論文の第二部を構成する四つの章がこのような問題を中心的に扱っている。

すなわち、「文学論」講義における「超自然F」をめぐる議論と並行した「マクベス」

講義における演出効果の話題との関係性や、講義で議論されながら『文学論』では省略された喜劇と悲劇の区別をめぐる議論と短篇『倫敦塔』における劇場の比喩との相互的な関係性を論じる第四章、『文学論』における描写論（「幻惑」論）の曖昧さ、限界性が、時間軸の中に視覚的イメージを置き、「残像」の作用によって出来事的に生じる情緒（f）と視覚的イメージの接続を補強する『草枕』の表現によって代補されているとする第五章、読者が言語的媒介の作用を後景化させ作品世界との心理的距離を極小化すること（「間隔」論）によって虚構世界の現実性を感じる（「幻惑」論）と、『野分』において語り手が読者に「哲理」を説く（「哲理的間隔論」）という双方向の両立可能性が議論されていることの意味を探る第六章など、テキスト間の関係を単線的な因果論的構図に回収するのではなく、輻輳的な可能性に開かれた様態として把握する問題認識のあり方がそこには提示されており、本論文の中軸をなす論考群として位置づけられる。

本論文はさらに、『文学論』生成過程をめぐる問題に加えて、初版以降の本文の継承を跡づけ、刊本『文学論』受容の様相までを視野に入れている。

そのような問題意識は、東京帝国大学における漱石の前任者である小泉八雲の思想的基盤や受講生による評価を検証し、就任当初の漱石を取りまいた状況の実態を描き出した第一章、「文学論」講義の時代の学生のシェイクスピア劇受容と漱石の演劇に関わる問題意識との落差を話題とした第四章などにもうかがえるが、とりわけ注目されるのは、受容の問題を同時代の科学思想との関わりから位置づけている点である。服部は、『文学論』刊行後の同時代において、十九世紀後半以降の科学思想の普及を受けて「文学の科学」としての文学論への関心が高まったことを背景に、小泉八雲や厨川白村の「文学入門」的著作と漱石『文学論』に共通する受容の基盤を大正期の「通俗科学」の流行に見出している（第九章）。これらの議論は、十九世紀の初期社会学における集合・集団概念や、それと対になった個体・個人概念の思想的意味と『文学論』における「集合的 F」との関係性を話題にした第七章の議論を引き継ぐものといえるが、そのような広範な問題領域と『文学論』をめぐる生じた現象との具体的な接続可能性が示されたことは、従来の漱石研究の枠を超える視座として高く評価できる。

本論文は最終二章で受容の問題の視野をさらに広げ、中国語訳『文学論』を対象に、『文学論』の理論とそれを受容する環境との歴史的な関係を「知的言説の移動」の問題として論じる新たな研究領域を開拓している。張我軍による最初の中国語訳『文学論』の「原文」の考証を行った第十章、成仿吾の批評言説に潜在する『文学論』受容における数学的語彙の来歴を考察した第十一章がそれにあたる。これらの議論はなお限定された論点の検討にとどまっており、一つの可能性として提起された問題領域と見るべきだが、大正期の日本国内における『文学論』受容の環境に関する議論と接続されることによって、「文学の科学」としての文学論への欲望を総合的に検討する可能性を示唆したものとして評価できる。

以上のように、本論文は、生成過程からその受容に至るまで、きわめて広範囲な視野の中で『文学論』を位置づけた点で重要な指摘を多く含むが、一方で、問題点がないわけでは

ない。

漱石がロンドン留学時代に記した膨大なノートは、その一部が『文学論』に用いられているため「文学論ノート」と称されるが、その実態は、むしろ文明論としての壮大な構想をもつものである。服部君は、「文学論ノート」と『文学論』のあいだに五年の歳月が介在すること、前者が断片的なメモの集積であることなどから、「文学論ノート」に過度な意味を求めることを慎重に避けているが、両者が根底において連関していることは確かであり、『文学論』の生成をより本質的に論じる上で、ロンドン時代のノートとの関係を一層掘り下げる必要が認められる。

また、講義と初期創作との相互反照的な関係を示したことは本論の重要な成果であり、今後の漱石研究にとって画期的な視座となることは間違いないが、それだけに、講義と創作との回路を検証する際、議論に適合する作品の特定部分に焦点化する傾向があり、両者を直線的・一義的に関係づける危険性も一部には認められる。この点については、作品総体の文脈や作品史的な視野の中で厳密に検証することが求められる。

同時代における科学思想との関わりも『文学論』研究として斬新な視座といえるが、この問題は十九世紀後半以降における自然科学と文芸との接点のひとつの現れとみるべきであり、科学思想の基本的なパラダイムと「文学の科学」としての文学論の関係の全体像や、両者の関係に内在する時差やズレを含めて、より広い思想史的視野の中で意味づけることが必要だろう。

ただし、上記の問題点は、本論文の成果を俟ってはじめて浮き彫りにされたものといってもよく、むしろ今後の『文学論』研究の可能性として位置づけるべきだろう。

以上のように、本論文は、今後の研究の進展に向けて開かれた可能性の部分をも含めて、夏目漱石『文学論』に直接的に関わる研究のみならず、日本語文学圏を越えた近現代文学の研究全般に向けて学術的な意義を有する研究論文であり、利用した膨大な資料の扱い、先行する諸研究との関係性の明示など、研究上の手続きの面でも適切な論文と認めることができる。

よって、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与にふさわしいものであると判断するものである。

## 概要

『文学論』は、漱石の講義に出席していた受講生・中川芳太郎のノートを基に中川自身が作成した原稿に漱石が大幅に手を加えて成ったものだが、諸事情から、いわば生成過程の途上で刊行されたため、十全な形で漱石の意図が反映されていない部分がある。そのため、従来、評価が定まらない中で十分な研究がなされてこなかったが、近年ようやく研究対象として注目されつつある。だが、成立過程にまで遡って詳細に論じたものはこれまでにない。本論文はこれに加えて、講義と『文学論』との対応関係や講義と初期創作の相互の関係、さらには刊行後の諸本間の異同や翻訳等による受容様相などを広い視野から総合

的に論じており、その意味で、『文学論』研究の新たな基盤としての意味を担っている。このような論点に基づき、本論文は序論および三部十一章の本論で構成されている。

第一部は、漱石の「文学論」講義が行われた東京帝国大学文科大学英文学科の環境や同時代の英文学研究状況を概観した上で、漱石講義の受講ノートの基礎的な分析が示される。

まず第一章では、漱石留学当時のイギリスにおける近代文学研究草創期としての様相を概観し、これを前提に「文学論序」にみられる漱石の留学観を解析し、その上で、漱石の前任者である小泉八雲の英文学講義と社会進化論との関わりを論じる。

つづく第二章では、若月紫蘭、岸重次、森卷吉、金子健二、木下利玄ら、漱石の講義を聴いた複数の学生の受講ノートの分析をふまえて、刊本『文学論』の基盤となったにもかかわらず未整理のまま残されていた中川芳太郎の受講ノートを整理し、これが二系統のノートの混在したものであることを指摘する。さらに金子健二、木下利玄の日記を参照することで、講義の時間割を再現している。

第三章では、帰国後最初の講義「形式論」の受講ノートと刊本『英文学形式論』(1924)との比較などによって、留学時の構想と講義とを接合するものとして、講義に「序論」が存在したことを実証し、その内容が、のちに漱石が示す「自己本位」という概念の原型をなすことを論証する。これをふまえて、漱石没後に刊行された『英文学形式論』に編集段階での操作が加わっている可能性を指摘し、さらに、留学時の構想と講義内容との落差から、「形式論」構想の半分が講じられることなく放棄されたこと、そしてそれがむしろ漱石の文学理論の構想の壮大さを示していることを明らかにする。

第二部では、『文学論』出版に向けて漱石自身が行った加筆訂正作業の過程を分析し、講義および初期創作との相互的な関係が論じられる。

まず第四章で服部君は、「文学論」講義がシェイクスピア講読講義と並行して行われていたことに着目し、ロンドンでのシェイクスピア上演の実際および漱石の観劇体験の調査をふまえて、「マクベス」に関する漱石の論文が、東京帝国大学での「マクベス」講義中に執筆され、同時に「文学論」講義にそれが反映されていることを指摘する。その上で、刊本『文学論』に収録されなかった講義箇所、悲劇および喜劇と観客の情緒作用との関係が論じられていたこと、そしてその演劇論が初期短篇の『倫敦塔』(1905)に反映していることを論証している。

第五章では、『文学論』原稿、受講ノート、漱石自筆メモ等の分析をふまえて、留学時代の構想から『文学論』刊行に至る過程で描写論の大幅な増補がなされたことを検証し、その増補が『文学論』の根本原理たる「幻惑」(作品世界への没入体験)と密接に関わることを示す一方、増補の時期と執筆時期が重なる『草枕』(1906)との間に視覚的な描写をめぐる重要な連動があることを明らかにする。

「幻惑」をめぐるこの分析を前提として、第六章では、「間隔的幻惑」を『文学論』の軸と位置づけ、『文学論』成立過程にその論理の生成を跡づけた上で、同時期の創作『野分』(1907)との連動を論じる。さらに『野分』脱稿後に『文学論』の「間隔論」が改稿された可

能性を示し、論文には示し得ない実践的「幻惑」の装置としての社会的感化の意志が創作『野分』に託されたとする。

つづく第七章では、中川芳太郎の草稿から漱石自身による書き下ろし原稿に差し替えられた『文学論』の後半部分について、漱石の原稿と中川の草稿とを比較し、『文学論』原稿への加筆直前に発表された『草枕』『二百十日』(1906)『野分』に底流する社会変革のモチーフが「文学論」講義で「集合的F」を論じていた時期に重なることを論証する。同時にこれらの創作が「十八世紀文学」講義の影響下にもあることを示す一方、木下利玄の受講ノート等から創作が同講義に反映していたことを指摘する。

第三部では、『文学論』初版刊行後の諸版本の本文異同を詳細に調査した上で、これら諸版本の抱える問題を分析し、さらに中国語訳『文学論』のもつ意味が論じられる。

まず第八章では、漱石の校訂を経ているはずの『文学論』初版から第四版までの諸版に多くの誤植が残った経緯を跡づけた上で、漱石没後の諸版本の本文について整理し、森田草平の編集になる縮刷版『文学論』に森田による独自の修正や英文の訳し直しがみられるなど、小宮豊隆らによる校訂が施された岩波書店版第三次『漱石全集』に至るまでの本文補訂の問題を具体的に浮き彫りにする。

第九章では、『文学論』受容の問題をより広い視野で捉えるため、小泉八雲の帝大英文学科講義の日本語訳講義録を分析し、科学啓蒙書および文学概論書の隆盛を背景に、教養主義との関わりにおいて同時代に広く受容された「通俗科学」(ポピュラー・サイエンス)のひとつとして厨川白村『近代文学十講』や小泉八雲『文学入門』を位置づける。その上で小泉八雲講義録の中国語訳に言及する。

これを受けて第十・十一章では、漱石没後の『文学論』の中国語訳が取り上げられる。先ず第十章では、台湾で日本語教育を受け日本の大陸政策に加担するという履歴をもつ張我軍による中国語訳『文学論』が縮刷版『文学論』を底本とすることを論証し、併せて、張訳文を批判した王向遠の「原文」把握の曖昧さを指摘する。その上で、張我軍ら中国の知識人たちが日本語を介して学術・理論を受容する経路のひとつとして『文学論』翻訳が担っていた政治的意味を問い直している。

最終第十一章では、上海で活躍した批評家成仿吾の批評にみられる「微分」の概念が漱石の『文学論』を背景とすること、さらに成仿吾の留学当時の日本において、文学・科学・哲学を横断するような科学ジャーナリズムが着目されていたことを背景に「文学の科学」を求める欲求がそこに働いていたことを指摘し、同時代の言説編成の産物としての「文学理論」という視座から『文学論』を捉え返すことの必要性を指摘する。

(論文審査報告より)